

タイトル	献辞
著者	館田, 晶子; TATEDA, Akiko
引用	北海学園大学学園論集(193): -
発行日	2024-03-27

献辞

法学部長 館 田 晶 子

本学に長く奉職された法学部政治学科の佐藤克廣先生は、2024年3月末日を以て定年退職されます。この度退職記念号が発行されるにあたり、ひとこと送別の辞を述べさせていただきます。

佐藤克廣先生は、1976年に中央大学法学部政治学科を卒業後、同大学大学院法学研究科政治学専攻博士前期課程を経て1981年3月に同大学大学院博士後期課程を単位取得満期退学、同年4月に本学法学部に講師として着任されました。1986年には助教授、1994年には教授に昇任され、同年より大学院法学研究科修士課程担当、1999年より同博士課程担当となり、学生及び院生の指導に当たってこられました。この間、2015年度から2017年度にかけての3年間、大学院法学研究科長も務められました。また、1987年にはレスブリッジ大学に交換教授として赴任され、1994年以降はポートランド州立大学の客員研究員として3度に渡り通算3年間、アメリカで在外研究に当たられました。

佐藤先生の北海学園大学法学部での在任期間は43年に及び、大学人としての人生のほとんどを本学とともに歩んでこられたこととなります。その間、法学部では1999年の政治学科設置という大きな改革があり、佐藤先生もその設立メンバーとしてご尽力されました。教育面では、学部専門科目の「行政学」を担当されたほか、基礎演習、政治学入門、地方自治入門などの基礎的な科目も担当され、また大学院法学研究科においても行政学特論や行政学特殊研究を担当され、教育に尽くされました。

近年の先生の特筆すべき功績としては、法政大学への「国内留学」制度の導入が挙げられます。2019年に締結された法政大学との単位互換協定の締結にもとづくこの学生交流制度は、佐藤先生の幅広い人脈なくしては実現しなかったものといえましょう。2020年のコロナ下でスタートする事にはなりましたが、当初から学生の関心は高く、毎年熱意ある優秀な学生を送り出しています。佐藤先生は制度の導入以来、一貫してこの運営に主導的立場に関わってこられ、法学部の人気プログラムの一つに育てあげられました。

研究者としての佐藤先生のご業績は多岐に渡ります。先生は初期にはアメリカ合衆国陸軍省工兵局の水資源政策の決定過程への市民参加に着目したご研究をまとめられました。その後、本学着任により北海道との縁を得られてからは、その知見をもとに、北海道における自治体行政への住民参画、道内市町村を中心とする日本の地方自治体における政策評価の現状と留意点など、地

元に密着したご研究に着手されています。佐藤先生は、その時々で地方が直面するアクチュアルな行政課題に積極的に取り組んでこられました。1990年代初期のバブル崩壊の時期にはリゾート法や第三セクターに関するご研究に当たられ、その後の地方分権論が注目された時期には自治体の広域行政や道州制についても論じておられます。さらに、自治体レベルの政策評価や行政への市民参加のご研究は、北海道政策評価委員会や札幌市行政評価委員会、石狩市市民参加条例検討委員会などで委員長を務められることを通じて、行政実務の現場で生かされることとなりました。現在も北海道地方自治研究所理事長を務められるなど、学問研究と現場をつなぎ、北海道における本学の存在感を高めることに大きく貢献されております。

佐藤先生は、本学吹奏楽部の顧問を長く務めてこられました。ご自身でも管楽器を演奏する音楽家であり、札幌市内のアマチュアオーケストラに所属されて舞台に上がることもあると聞いております。懇親の場で音楽について語る先生は大変生き生きとされておりました。またお洒落な一面もお持ちで、大学の行事の際にはよく蝶ネクタイをしておられたのが印象的でした。佐藤先生が各方面に幅広い人脈を広げられご活躍されたその背景には、学問に裏打ちされた確かなご見識に加え、音楽を愛する洒落な文化人としての一面もあったのではと思う次第です。

佐藤克廣先生には、本学における多大なるご貢献により、2024年4月1日付で北海学園大学名誉教授の称号が授与されます。

今後もますます公私に渡りお元気でご活躍されることを心より祈念いたします。